

日本語漢字音の清濁音・長短音・促音の指導について

——北京語・朝鮮語話者の母語をてがかりに——

丸田孝志
(清州大学校)

はじめに

北京語(中国標準語)・朝鮮語(韓国語)・日本語における漢字音の対応関係については、すでに様々な研究がなされている。しかし、それぞれの言語教育の現場においては、これらの成果を活用する余地がまだ残されていると考える。本稿は、北京語・朝鮮語話者が特に苦手とする日本語の発音・表記(清濁音・長短音・促音)を、漢字音についていかに指導するかという視角から、三言語の漢字音の対応関係を整理したものである。この方法において、学習者は耳で区別しにくい日本語の発音の違いを、母語の漢字音を頼りにしながら判別することが期待される。そして、この側面から漢語音に関する従来の研究を見直し、日本語教育の実践に役立てたいというのが本稿のねらいである。

調査の方法について

日本語漢字音の清濁音・長短音・促音と、学習者の母語の漢字音との対応関係を検討する。日本語のいわゆる清音・濁音の問題は、音韻的には無声音・有声音の区別(か/が行、たてと/だでど、ち/じ、つ/ず、ば/ば行)として整理できる。本稿では、これらの対応において考察するが、「ば行」は漢字音では語頭に立たず、また、「つ/ず」の対応は漢字音においては数が非常に少ないので、本稿では便宜上、これらの音をのぞく清濁音の対応という形で論を展開する。

対象とした漢字は日本の常用漢字のうち、音読みのあるもの(国字を除く1903字)に限った。作業にあたっては、先行研究等に示された漢字音の対応表に依拠するところが大きかった。北京語については、特に三好理英子氏(1993)の表を上述の視角から修正・再整理し、清濁音と声調の関係については独自に統計をとった。朝鮮語は、時事英語社辞書編集室『アシスト日韓辞典』の付表(1994)を基礎資料とした。

各言語で一つの漢字に音が二つ以上ある場合は、本稿で扱う音に限って、以下の原則に従って処理した。意味・用法が異なる複数の音が安定的に存在していると認められるものは、「複数音」として統計処理した¹⁾。

ただし、朝鮮語音で日本語音との顕著な対応が認められるものは、特殊な音でも複数音に数え、北京語音にはそのような対応がほとんどないので捨象した。朝鮮語の初声が「ㄴ」「ㄹ」の漢字は、「ㄴ」「ㄹ」が脱落した形は数に入れず、「ㄴ」「ㄹ」のものだけを対象とし、「ㄴ」「ㄹ」の二つの音があるものは「ㄹ」に統一した。また、北京語では、助詞の音(「了」<le>、「着」<zhe>)なども統計から除外した。複数音を認めた漢字は、以下のとおりである。

1. 日本語音(*は朝鮮音との対応のみ)

絵(かいえ) 下(かげ) 画(かくが) 楽(らくがく) 強(きょうごう)
行(こうぎょう) 象(しょうぞう) 大(たいだい) 地(ちじ)
重(ちょうじゅう) 読*(どく/とう) 世(せ/せい) 由(ゆ/ゆう)
右(う/ゆう) 九(く/きゅう) 後(ご/こう) 合(ごうがっ)
執(しゅう/しつ) 十(じゅう/じゅう/じっ) 悪*(あく/お) 易*(い/えき)
殺*(さつ/さい) 切*(せつ/さい) 説*(せつ/ぜつ) 早*(そう/さっ)

2. 北京語音

彈(dan/tan) 調(diao/tiao) 澄(deng/cheng) 粘(nian/zhan)
樂(le/yue) 率(lü/shuai) 給(gei/ji) 括(gua/kuo) 行(hang/xing)
校(jiao/xiao) 畜(xi/chu) 朝(zhao/chao) 摺(zhai/ze)
伝(zhuan/chuan) 重(zhong/chong) 着(zhao/zhuo)

3. 朝鮮語音

茶(다/차) 読(독/두) 便(변/편) 復(복/부)
不(부/불) 索(삭/색) 殺(살/쇄) 説(설/세)
悪(악/오) 樂(락/악) 六(육/유) 易(이/역)
刺(자/척) 切(절/체) 画(화/획)

なお、日本の常用漢字表の中には、日本の文化、宗教等に関わる特殊な音も多い(「神宮」<じんぐう>など)。また、基礎語彙として使用される漢語にも特殊な音が散見される(「工夫」<くふう>など)。このような音については、統計には入れず、表中に「特殊音」として付記した。その他、「人間」<にんげん>などのように、基礎語彙に使われながら常用漢字表に収められていない音は、日本語能力試験1級の語彙集から補充した。また、常用漢字音の中でも使用範囲の極めて狭い音(「行脚」<あんぎゃ>)などは表から除外し、末尾に付記するにとどめた。

以上の作業を通じて、学習者が母語をてがかりに、

不得手とする日本語漢字音を判別できる幾つかの原則が示される。例えば、「観光」「結婚」という語の読みが、「がんこう」だったのか「がنگこ」だったのか、「げっこん」だったのか「けこん」だったのかと判断に迷う場合がある。その際、母語の漢字音にある音が存在する(しない)場合、日本語は濁音・長音・促音である(ではない)という推測が可能となる。新たに学ぶ際には、原則を同時に示すことで記憶をより確実にできる。すべての音について明確な原則が立てられるわけではないが、この方法によって、不得手な音の判別が容易になり、記憶の定着や未習の語の習得に効果をもたらすことができると考える。また、明確な傾向がありながらも例外の多いものに関しては、例外を特記することによって、中級以上の学習者が記憶の定着をはかり、学習効率を上げるのに使用できる。

なお、本稿は、特に既習の音や耳で聴いた音声に対して、母語をてがかりとしながら正しい表記を把握するという立場で論を展開するため、発音そのものの矯正の問題等については言及しない²⁾。北京語の表記は拼音字母により、日本語は「ア」～「オ」段を示す場合、カタカナ表記とした。

1. 北京語と日本語の対応

1. 北京語の声母と日本語の清音・濁音

表1は、北京語の声母と日本語の濁音・清音との対応関係を示したものである。声母「g」「k」「q」では「か」行が圧倒的に優勢である。「j」「x」は、例外を特記することによって中級以上の学習者への便宜を図るものである。本稿が対象とした漢字音における「か」行：「が」行の比率は約4.5：1であり、「h」はその比率に近い(約4.9：1)。「が」行はゼロ子音に集中しており、「n」の「が行」は「ぎ」のみである。「たてと」と「だでど」は、いずれの声母においても明確な傾向は見られない。北京語話者は、特に「たてと」と「だでど」の判別を不得手とされると言われるので、これについては、他の方法を考えなければならない。「ち」と「じ」については、「j」「sh」「r」と歯音(z, c, s), ゼロ子音においては、特殊音も含めて、すべて「じ」が対応している。

2. 北京語の声調と日本語の清音・濁音

日本語漢字音の濁音の多くは、北京語の第二声、第四声に対応する。しかし、二声、四声には清音も分布し、その数は濁音よりもはるかに多いので、清濁の判別には利用できない。一方、一声、三声には、濁音が比較的少ないので、これらと日本語の清濁音の対応関係を見ることにする(表2)。

表1 北京語の声母と日本語の清音・濁音の対応関係

声母	①清音：濁音の比率	①の例外音(特殊音)	その他の音
d	たてと：だでど=67:24 ち：じ=9:3		無
t	たてと：だでど=47:15 ち：じ=7:1		つず
n	か行：が行=0:5 たてと：だでど=2:7 ち：じ=1:3		な行
l	ち：じ=1:0		ら行
g	か行：が行=76:3	該概剛(宮国)	無
k	か行：が行=41:2	慨拷	無
h	か行：が行=64:13		も
j	か行：が行=116:10 ち：じ=0:3	街杖具軍郡鯨劇擊激減(井)(解間極)	さ行 ざぜ
q	か行：が行=45:4 ち：じ=0:1	欺群甚/強	さ行 ぜ
x	か行：が行=53:9 ち：じ=2:12	学戲穢曉玄弦限現/下蓄(心)(形穢)	しぞ
zh	ち：じ=33:12 たてと：だでど=11:2		さ行 ね
ch	ち：じ=20:9 たてと：だでど=4:1 か行：が行=1:0		さ行
sh	ち：じ=0:12 たてと：だでど=1:0	(社)所盛(蛇)	さ行 ぜぞ
r	ち：じ=0:13	(日)	な行 せぜ
z	ち：じ=0:5 たてと：だでど=1:0	(自子)	さ行 ざぞ
c	ち：じ=0:5		さ行 ざぞ
s	ち：じ=0:4		さ行 ずぞ
0*	か行：が行=7:48 ち：じ=1:2	滴完危蜚研験硬(仰)	あ行 ば行 やゆよわ ま行

／以下は日本語複数音の漢字、()は「特殊音」(以下も同様)
0*は介音を含むゼロ子音

表2 北京語の声調と日本語の清音・濁音の対応関係

声調	①清音：濁音の比率	①の濁音(特殊音)
第一声	か行：が行=115:9 たてと：だでど=30:1 ち：じ=20:5	街該欺穢軍鯨劇擊激剛(宮鯨)脱
第三声	か行：が行=62:14 たてと：だでど=24:5 ち：じ=7:10	「我雅眼偽仰偶五午語」 穢曉減 拷/強(解)

()内は、ゼロ子音の音

表2では、一声の「たてと：だでど」において、特に明確な対応が見られる。また、表1の例外音の多くが、表2においても例外として現われていること、三声のゼロ子音はすべて「か」行音であり、これらが三声の「か」行音の中で大きな比率を占めていることは、学習者が、声母と声調を手掛かりに清濁を判別する上

で便宜を提供してくれる。更に、表2の濁音には、声母「h」の音がないことから、一声・三声の「h」の音は、すべて清音であることがわかる。

3. 北京語の母音および韻尾と日本語の清音・濁音

次に北京語の母音および韻尾と日本語の清音・濁音の対応関係について検討する。これらの対応を検討するのは、声母と韻母に一定の結びつきがあるからである。対応関係をより簡明に提示するために、ここではまず、濁音の集中している声母「n」とゼロ子音の音を統計から外し、これ以外の声母の音について検討をする。

表3は、北京語の韻尾と日本語の清濁音の対応関係を示したものである。韻尾「n」においては、特に「ぐん」「げん」の音に注意すべきことがわかる。これらの音の多くは、表1でも例外として現れており、「ぐん」は常用漢字音では表の3字のみである。表4は、北京語の母音と日本語の清濁音の対応関係をまとめたものである。但し、比較的明確な原則の立てられる対応関係のみに限って提示してある。

表3 北京語の韻尾と日本語の清音・濁音の対応関係

韻尾	①n/0子音以外の音	①の濁音	n/0子音の音
-n	か行：が行=97：9	含群軍郡弦現滅 幻玄(間)	か行：が行=3：12
-ng	か行：が行=76：3	鯨剛/行(形宮響)	か行：が行=2：2

表4 北京語の母音と日本語の清音・濁音の対応関係

母音	①n/0子音以外の音	①の濁音	n/0子音の音
i 介音	か行：が行=99：7	街曉弦絃 現限/強	か行：が行=3：10
e 主母音	か行：が行=68：3 たてと：だで=18：0	費街字	か行：が行=0：5
u 介音	か行：が行=67：2	画幻	か行：が行=2：3
u 介音 主母音 尾音	か行：か行=122：5	画幻護互/後 (國)	か行：が行=2：9
o 主母音 尾音	か行：か行=84：5	曉弓豪拷/後	か行：が行=1：1

韻母の表記と実際の発音のずれの問題は捨象して、表記に従って整理
ただし、「ui」は「uei」、「iu」は「iou」として処理(以下も同様)

4. 北京語の母音と日本語の長音・短音

漢字音の長短音の区別において問題となるのは、母音が「ウ」・「ウ+う」「エ」・「エ+い」「オ」・「オ+う」(「ウ」「オ」段には拗音も含む)の場合である。これ以外は長短の区別上、問題とならないので、「その他」として検討の対象から外すことができる(二拍音：「ア+い」「ウ+い」「ーき」「ーく」「ーち」「ーつ」「ーん」、

一拍音：「ア」「ャ」「イ」。なお、「エ」短音は主に複数音、特殊音である。表5は、「ウ」「エ」「オ」の長短音と北京語の韻母との対応関係を示したものである。

母音「a」「i」(介音を含む)を含む韻母には、短音がほとんど見られない。母音「e」を含む韻母には「その他」が多いが、短音は全く見られない(韻母「e」と同音の韻母「o」には「その他」のみ分布)。韻母「u」では短音が圧倒的で、母音「u」を含む韻母にも短音が一定の割合を占めている。「-ng」は、少数の例外を除いて日本語では「-い」もしくは「-う」の形になるが、これらはすべて長音である。

表5 北京語の韻母と日本語の長音・短音の対応関係

韻母	①長音：短音	①の例外音(特殊音)	①以外の音
a	7：0		28(10：18)
ia	4：1	下(家)	17(14：3)
ua	0：1	誇	9(6：3)
ao	68：3	保孝茂	7(0：7)
iao	51：0		4(0：4)
e		谷(悪)	
ie	9：0	解	33(6：37)
i [i]	46：0	(氣體弟)	132(67：27)
i [ɿ] [ʅ]	8：2	是/世	94(67：27)
ui	4：0	(会絵患)	55(25：30)
u	3：112	秘数入(夫)	60(1：59)
ou	39：11		4(2：2)
iu	34：5	酒油/右九由(修有留)	1(0：1)
ü	5：41	拘婿遇隅裕(魚)	17(0：17)
en	3：0		47(0：47)
-ng	330：2	種夢(工登)	1(0：1)

()内は「その他」の一拍音：二拍音の比率

5. 北京語と日本語の促音

古藤友子氏(1987)は、北京語の「-i」「-o」「-u」には入声音のなごり(く、き、つ、ち、う)が現われ、韻尾を持たない単母音(介音+母音を含む)にも入声音が多いことを明らかにされている。これらの内、特に「く」「き」「つ」「ち」が促音に関わる音である。促音化する音は、特に韻母「uo」「e」「ie」「ue」に集中しているが、明確な原則は見られない。促音については、朝鮮音の項で改めて取り上げる³⁾。

II. 朝鮮語と日本語の対応

1. 朝鮮語の初声と日本語の清音・濁音

表6は、日本語の清音・濁音と朝鮮語の初声との対

応関係を示したものである。「か」行・「が」行音は、「ㄱ」「ㄷ」「ㄹ」のみに表れ、「ㄱ」においては「か」行が優勢で、ゼロ子音では「が」行が優勢である。「たてと」と「だでど」については、「え」は「たてと」のみであるが、「ㄴ」では「耐」以外はすべて「だでど」である。「ち」と「じ」については、「ㄴ」では特殊音も含めてすべて「じ」で、ゼロ子音でも「賃」を除いてすべて「じ」が対応している。なお、「ㄱ」の例外の濁音は、北京音「g」「k」「j」「q」の例外とほぼ一致しており、常用漢字で「ぐん」「げき」の音は、この例外に現われた6字だけである。また、日本語音の「でん」は、「ス」の例外に示された4字のみである。

表6 朝鮮語の初声と日本語の清音・濁音の対応関係

初声	①清音：濁音の比率	①の例外音（特殊音）	その他の音
ㄱ	か行：が行=278:18	街概概技欺員郡群重跡 激劇撃賊蒜拷剛／強 (宮解問郷極国)	無
ㅋ	か行：が行=1:0		無
ㆁ	か行：が行=1:0		無
ㄴ	たてと：だでど=1:7 ち：じ=0:1	耐	な行
ㄷ	たてと：だでど=62:24 ち：じ=2:0		無
ㄸ	たてと：だでど=29:10		無
ㄹ	ち：じ=0:40	(仕社所盛神心)	さ行 ずぜぞ
ㅅ	たてと：だでど=28:7 ち：じ=50:26	第題弟田伝殿電(弟)	さ行 ざぜぞ ね
ㅆ	たてと：だでど=14:0 ち：じ=24:5	次軸登 銃充(非)	さ行
ㅇ	か行：が行=122:25		わ お
ㅇ	か行：が行=6:57 ち：じ=1:13	滴完緩危泣研 賃(日)	あ行 な行 やゆよせぜ

2. 朝鮮語の中声と日本語の清音・濁音

表7は、朝鮮語の中声と日本語の清音・濁音の対応関係をまとめたものである。ここにおいても、北京語の場合と同様に、「ガ」行音が特に集中しているゼロ子音の音を統計から除外した。また、特に明確な対応関係が現れないものも表から除外した。この処理によって、「ㄱ」「ㄷ」の「ガ」行音は、表7においては各中声にふりわけられた。「たてと」「だでど」については、「ㄴ」「ㄷ」「ㄹ」において、一定の手がかりが得られる。表8は、表7を更に各母音の要素ごとにまとめたものである。

表7 朝鮮語の中声と日本語の清音・濁音の対応関係1

母音	①0子音以外の音	①の濁音	0子音の音
ㅏ	か行：が行=67:10	街街字含虐限合剛 ／下強(間)	か行：が行=0:10
ㅑ	か行：が行=5:0	(郷)	
ㅓ	か行：が行=22:1 たてと：だでど=30:4	滅 田伝殿電	か行：が行=0:7
ㅕ	か行：が行=52:6	跡激撃現玄弦 (形)	か行：が行=1:2
ㅗ	か行：が行=14:0		
ㅛ	か行：が行=44:4	護拷豪号	か行：が行=0:8
ㅜ	か行：が行=50:3	画丸幻	か行：が行=3:1
ㅠ	か行：が行=13:0		か行：が行=0:1
ㅡ	か行：が行=12:1	曉	
ㅜ	か行：が行=34:5 たてと：だでど=8:1	員郡群重／後 鈍(宮国)	か行：が行=0:5
ㅠ	か行：が行=9:0		
ㅡ	か行：が行=21:1 たてと：だでど=7:0 ち：じ=0:4	劇(極) (等)	か行：が行=1:3
ㅣ	か行：が行=26:3	技欺恭	

表8 朝鮮語の中声と日本語の清音・濁音の対応関係2

母音	①0子音以外の音	①の濁音	子音の音
ㅏ	か行：が行=88:7	跡激撃現玄弦滅	か行：が行=1:2
ㅑ	たてと：だでど=30:4	田伝殿電(形)	
ㅓ	か行：が行=119:8	画丸幻曉護拷豪号	か行：が行=3:10
ㅕ	か行：が行=53:5 たてと：だでど=8:1	員郡群重／後 鈍(宮国)	か行：が行=1:10
ㅗ	か行：が行=23:3 たてと：だでど=7:0 ち：じ=0:4	戲機劇(極) (等)	か行：が行=1:9

3. 朝鮮語の中声および終声と日本語の長音・短音

朝鮮語の終声をとまなう漢字音には、長短音の問題に関わらない日本語の二拍音が規則的に分布している。故に、まず終声を持たず中声で終わる漢字が検討の対象となる。また、明らかに長音と関係のある終声「ㅇ」「ㅁ」についても検討する。表9は、朝鮮語の中声（終声のない漢字音の中声）および終声と日本語の長音・短音の対応関係を、北京語の場合と同様に、長音・短音・その他に分けて示したものである。

長音は「ㄱ」「ㅋ」「ㄴ」「ㄷ」と終声「ㅇ」「ㅁ」に集中している。「ㄴ」「ㄷ」においては、長音はすべて「エ+い」であり、短音はすべて「-よ」もしくは「よ」である。「ㄱ」「ㅋ」の長音もまた、すべて「エ」長音であるので、「ㄴ」を含む音において長短が問題となる

場合、複数音、特殊音を除いて、日本語の母音が「エ」であれば長音、「オ」であれば短音であると判断できる。「ユ」においては、日本語の母音が「ウ」である七つの音はすべて短音である。

表9 朝鮮語の中声および終声と日本語の長音・短音の対応関係

中声	①長音：短音	①の例外音（特殊音）	①以外の音
ト	0 : 1		96 (95 : 1)
ㄷ	8 : 21	(漁)	1 (0 : 1)
ㄱ	15 : 1	／世(体弟)	14 (0 : 14)
ㅋ	3 : 6		0
ㄲ	16 : 0	(恵)	6 (1 : 5)
ㄴ	80 : 72		3 (0 : 3)
ㄷ	2 : 0		4 (0 : 4)
ㄹ	32 : 1	墓	1 (0 : 1)
ㅌ	55 : 52		17 (0 : 17)
ㅍ	2 : 2		6 (3 : 3)
ㅊ	18 : 4	儒油倫癩(有留)	6 (3 : 3)
ㅣ	2 : 1		104(99 : 5)
終声	①長音：短音	①の例外音（特殊音）	①以外の音
ㅇ	316 : 2	夢種(土登)	1 (0 : 1)
ㅁ	33 : 0		8 (0 : 8)

()内は「その他」の一拍音：二拍音の比率

「ㄷ」に関しては、表10のように「オ」・「オ＋ウ」では長音が優勢であり、拗音「ゅ」を含まない「ウ」・「ウ＋ウ」では短音が優勢である。

表10 「ㄷ」の長短音分布

長音	オウ 27	ウ 6	ゅ 22
短音	オ 4	ウ 34	ゅ 14
例外と見なせる漢字	オ：斗 薄 茂 / 後 ウ：隅 偶 遇 數 極 優 [笑]		

4. 朝鮮語の終声と日本語の促音

周知のように朝鮮語漢字音の終声は、「ㄱ」→「く」／「き」、「ㄷ」→「つ」／「ち」、「ㄹ」→「う」／「つ」に対応しているが、これらの終声を持つ漢字のうち特に「く」「き」「つ」「ち」の音は促音化することが多く、反対にこれらの終声を持たない漢字が促音化することはほとんどない。学習者が、促音を落としたり、清音の前に存在しない促音をはさむ誤りは⁴⁾、終声の有無に注目すればほぼ避けられる。すなわち、終声を持つ漢字は日本語では二拍音であり、促音化した漢字が一拍音のように聞こえても、終声の存在から促音の存在

が明確に推定できるのである（北京語話者においても、上述の二拍音から促音の存在を知ることができる）。

ただし、これらの終声を持つ漢字すべてが促音化するわけではないので、有声子音や母音の前では促音化は起こらないこと、「ㄱ」「ㄷ」は無声子音の前で原則的に促音化すること、「く」「き」は「さ」行「た」行の前では促音化しないことも、併せて強調しておく必要がある⁵⁾。

表11に若干の例外を示す。その他の音に示された漢字は、「冊」を除いて、終声を伴いながら促音化しない。終声を伴わなくても、日本語音が「く」「つ」の形で終わり、しかも促音化するものは「借」「沸」だけである。「早」は「早速」などで促音化する。また「復」「殺」は「復活（復興）」「殺到」において朝鮮語音では終声がないが、日本語では促音となる。

表11 朝鮮語の終声と日本語音末尾の対応関係

終声	①日本語音末尾の比率	①のその他の音
ㄱ	く：き：その他=128：32：5	勃刺襲／作冊
ㄷ	つ：ち：その他= 82：5：1	未
ㄹ	う：つ = 33：8	
終声のない促音	借金など 沸騰など 復活など 早速など 殺到	

おわりに

最後に本稿の方法の有効性と問題点について、補足しておく。まず、本稿で触れなかった撥音も学習者が不得手とするものであるが、これも母語をてがかりに判別が可能となる。一方、本稿では、重箱読み、湯桶読みのような音訓を混ぜた読みや、日本文化などに関わる非常に特殊な読みの問題を捨象してあるので、文化系で専攻分野を学ぶ上級者に対しては、慎重な適用が望まれる。また、本稿では、学習者の母語の音による類推が日本語の発音に影響する問題について課題が残された。例えば、朝鮮語の初声「ㄹ」「ㄷ」と「は／ば」行音、「ㄴ」「ㅌ」と「さ／ざ」行音の関係は、各初声に清濁音の近似値が分布しているため、学習者が混乱をきたしやすいという問題がある。

このような問題を含みながらも、本稿の方法には、一定の有効性を見ることができる。조남성氏(1993)は、韓国人学生の日本語漢字表記の誤りを、無作為に選んだ漢語(訓読みを含む)によって調査しているが、本稿の方法によれば、これらの誤りの内、難易度の高いものを中心とした3分の1程度は克服可能である。また、正しい表記の把握は、正しい発音把握のための重要な前提条件になる。本論の方法が、音声面からの

指導と併せて行われれば、より効果を上げられるもの
と考える。

日本語能力試験一級語彙から補充した音

(原則の提示に関わるもの)

人間 中国 障子 信者 近所 天井 用心 平等

常用漢字音から削除した音

(清濁/長短/促音非促音に関わるもの)

廻 合 脚 宮 供 倉 紅 貢 功 口 仮 懸
華 化 外 嫌 権 經 期 勤 嚴 食 着
成 修 就 衆 從 祝 数 出 頭 豆 想 内
通 度 頭 納 団 法 風 富 謀 立 流 露

註

- 1) 複数音の認定には造語力を基準とし、基礎語彙に使われる音でも造語力のないものは除外した。また、三好氏の表には北京語の複数音の認定等に問題や遺漏がある。本稿では北京語、日本語の複数音を統計に入れて修正を施したので、三好氏の統計とは異同がある。
- 2) なお、漢字音の対応には、音の受容と変遷に関する歴史的な背景があるが、これについては、取り合えず参考文献の諸論文(特に禹氏)を参照されたい。
- 3) この他、北京語話者の一部には、「ひ」を「し」に、「き」を「ち」に混同する誤りが見られるが、これも母語の音を頼りに判別が可能である。「ひ」は唇音(b, p, m)のみに、「き」は軟・硬口蓋音(g, k, h, j, q, x)とゼロ子音(介音を含む)のみにそれぞれ分布し、「し」、「ち」の分布とは重ならない(例外は「喫」[きつ, chi]のみ)。
- 4) これらの誤りは、拍の感覚の問題の他に、学習者が日本語の清音を、朝鮮語の激音や濃音によって代替させていることにも因ると思われる(朝鮮語の語中の激音や濃音は、日本語話者には促音のごとく聞こえる)。後者は、発音が表記に影響する誤りと考えられる。
- 5) 村木・中岡(1990)、望月(1974)、禹(1995)。この原則は、語中の有聲・無声音の判別にも有用である。

参考文献

倉石武四郎(1963)『岩波中国語辞典』「序説」, 岩波書店
望月八十吉(1974)『中国語と日本語』, 光生館

杉山太郎(1985)「日本語の発音」『日本語教育』55号
古藤友子(1987)「日中漢字音の対照」『日本語教育』62号
古藤友子(1990)「現代漢字音の対照 日本, 朝鮮・韓国, 中国における」『姫路独協大学外国語学部紀要』3
三好理英子(1993)「中国語(普通話)を第一言語とする日本語学習者のための日中漢字音対照研究」『日本語教育研究』26号
関光準(1987)「韓国人の日本語の促音の知覚について」『日本語教育』62号
禹燦三(1990)「韓国漢字音の終声子音と日本常用漢字音との対応関係について」中四国教育学会『教育学研究紀要』第36巻 第2部
禹燦三(1992)「常用漢字の韓日対応について-漢字音を中心に-」中四国教育学会『教育学研究紀要』第38巻 第2部
禹燦三(1995)「韓日漢字音の対照研究-日本語教育の観点から-」中四国教育学会『教育学研究紀要』第41巻 第2部
禹燦三(1995)「現代漢語の促音化についての一考察」『日本研究』第1輯, 韓南大学日本研究所
蔡京希(1993)「韓・日両国漢字音の対比研究-日本語教育のために-」『日語日文学研究』第13輯
조남성(1993)「한국인 일본어 학습자의 한자읽기 오답의 평가」『日本学報』第30輯
小学館・北京商務印書館共同編集(1991)『中日辞典』
朴成媛(1984)『現代日韓辞典』(机上版)「同字異音漢字一覧表」(高麗書林)
金宇烈(1987)『日本語漢字읽기용법辞典』「韓日漢字音対応」, 時事日語社
曹斗絃・金星出版社辞書部(1993)『New ace 漢韓辞典』(金星出版社)
時事英語社辞書編集室(1994)『アシスト日韓辞典』「일본어 한자음 쉽게 읽는 방법」
見坊豪紀主幹編集(1992)『大きな活字の三省堂国語辞典』(第四版)「常用漢字音訓一覧」
国際交流基金・日本国際教育協会(1994)『日本語能力試験出題規準』1, 2級語彙, 凡人社
日本語教育学会編(1994)『日本語教育ハンドブック』, 大修館書店
村木正武・中岡典子(1990)「撥音と促音-英語・中国語話者の発音」講座『日本語と日本語教育』3, 明治書院
吉田則夫(1990)「清音と濁音の区別-日本人・中国人の場合」講座『日本語と日本語教育』3, 明治書院